

JASPM第二回関東地区例会に向けての研究概要

『脱領土化をめぐるポピュラー音楽—1990年代—2000年代を中心に・日本のクラブカルチャーを通して』

武蔵大学大学院人文科学研究科社会学専攻
北村心平

1990年辺りを境にしてクラブカルチャーは大衆的に日本に定着し、参加者のグローバルなコミュニケーションがシーンの発展に生かされてきた。しかし日本のクラブカルチャーに関する先行研究を見ていくと、グローバリゼーションに関する記述に踏み込んだものは数少ない。本論文の目的は、クラブカルチャーがグローバル化によって境界を越えた相互行為の中で成り立つ文化とみなし、日本での位置づけを見ていくことで今日の音楽文化やサブカルチャーの一側面について考察することである。

グローバリゼーションに関する議論の中で、文化に対して焦点を当てているものとしては、文化の雑種性や複数性を伴いつつ単一性を孕む「脱領土化」(Tomlinson 1999=2000)の概念が挙げられるだろう。ただしクラブカルチャーは「閉鎖性」のある文化であり、「脱領土化」だけでは捉えきれない。このため「審美的コスモポリタニズム」(Urry 1995=2003)の概念を含めることで、クラブカルチャーが開放的である一方、趣味による閉鎖的な側面を併せ持つ文化として見ることができる。

日本のクラブカルチャーは主に90年代の巨大資本も関わったテクノ・ムーブメントとそれに付随する草の根の活発化の中で、大衆的でありながら「脱領土化」や「審美的コスモポリタニズム」の概念とクラブカルチャーとの関係を示唆している。また同じく90年代にレイヴという、屋外で開催されるイベントでは「トラベラー」と呼ばれる人達が深く関わる中で日本に取り入れられていくプロセスにも同様のことが言えそうである。

2000年代に入ると、日本のクラブカルチャーは商業化していく側面と、アンダーグラウンドを貫こうとする側面がみられるようになる。特に後者については国内で活動する人々によるものというよりは、外国人のDJ(外タレ)にゲスト出演してもらうことで維持されていた。このことをクラブカルチャーをグローバルに拡がる資源との関係に位置づけることができるのではないだろうか。クラブカルチャーは平等主義的でインフォーマルなつながりである「友情」(Chambers 2006=2015)の概念に符合するといえるものの、こうした関係がビジネスとして機能する「脱組織資本主義」(Urry 1995=2003)的であると言える。このことは2010年代に入りますます露骨に表れているように思う。

本発表にあたり、各章の細かい内容については時間の問題もあり深く触れることはできないため、第5章の「日本のレイヴ」について重点的に取り上げていきたい。レイヴの特徴として、印象的なロケーションを求めて都市から離れた場所で開催される。そこでは日本では本来禁止されているはずのドラッグの使用による仲間意識、日常生活からの離脱による開放感といった、国境や法律など、特定の空間に支配されている状態からのつかの間の「飛び地」(上野 2005:153)として経験される。レイヴは基本的に一晩で終了するため、ローカルリティがほとんど削がれているのである。インタビューに協力して頂いたKOTARO氏や書籍、雑誌の記述によると、日本では、特定の国民国家との絆が弱く世界中を旅しながら生活を送る「トラベラー」と呼ばれる人々が中心となりレイヴが持ち込まれた。かなり異色な文化といえるレイヴだが、1996年に約18000人を動員した「RAINBOW 2000」の開催がきっかけとなり社会現象として捉えられるようになる。レイヴは2000年代以降先細りを見せているが、近年の音楽シーン、とりわけフェスティバルに対して大きな影響を与えている。

日本のポピュラー音楽において、こうした海外と同時並行的なスタイルのまま消費・表現しようとする文化は数少なかったように思える。このようなグローバルな音楽文化について深く議論できたらと思う。

参考文献

Chambers, Deborah, 2006=2015, 辻大介／久保田裕之／東園子／藤田智博訳『友情化する社会—断片化の中の新たなくつながり>』岩波書店.

Tomlinson, John, 1999=2000, 片岡信訳『グローバリゼーション—文化帝国主義を越えて』青土社.

上野俊哉, 2005, 『アーバン・トライバル・スタディーズ—パーティ・クラブ文化の社会学』月曜社.

Urry, John, 1995=2003, 吉原直樹監訳『場所を消費する』法政大学出版局.